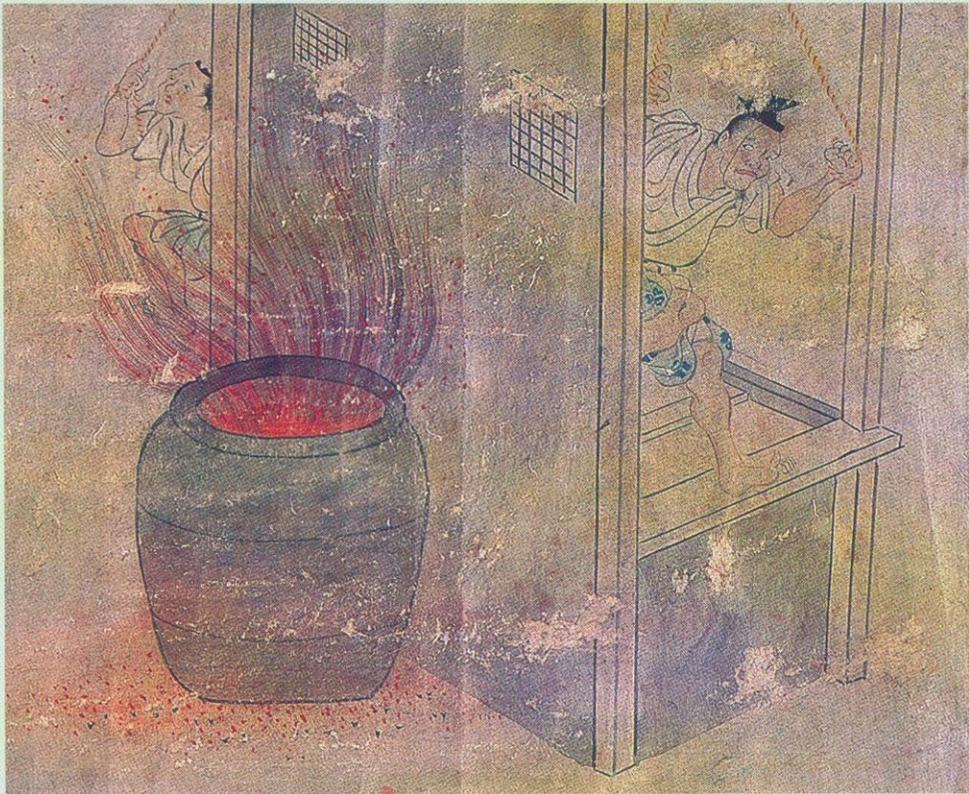


ほこ の うら い せき 銚 浦 遺 跡

- 中世の鑄造工房 -



溶解炉、タタラの絵 高松宮家本『東北院職人歌合』（国立歴史民俗博物館蔵）

2001

太宰府市教育委員会

1. 鋳物とは何だろう

「^{いもの}鋳物」は、銚ノ浦遺跡を知るうえで欠かすことができない用語です。そのため遺跡の紹介の前に簡単に説明します。

鋳物とは？

金属を溶かして、^{いがた}鋳型に流し込んで固め、目的の形をつくる作業を^{ちゅうぞう}鋳造といい、その作業により出来た製品を鋳物と呼びます。

鋳物の歴史

鋳物の歴史は古く、紀元前3500～3000年頃までさかのぼります。はじめは日本からはるか遠方の西アジア地域（現在のトルコ東部からイラク・イラン北部）で行われたのが起源で、そこから中国大陸を横断して朝鮮半島を通り、弥生時代中期（今から約2000年前）に日本へ伝来して来ました。

弥生時代には主に青銅を使って鋳造が行われました。当時の鋳造製品は武器や祭りの道具として使われていました。続く古墳時代には大規模な鉄、錫の生産が始まり、鏡などに使われています。奈良時代になると、奈良の東大寺大仏に代表されるような仏像などが数多く造られ始めます。奈良時代は仏教が国を治める上での中心的施策だったため、仏教に関する鋳造は^{かんえい}官営の工房が主に行っており、^{ほんしょう}梵鐘や仏具関係品も多く造られました。



弥生時代の青銅器の鋳型（広形銅矛）



中世の銭貨（宋銭）



現在に生きる鋳物

現在使われている10円、100円などの硬貨の先祖にあたる、^{ふほんせん}富本銭や^{わどうかいちん}和同開珎もこの時代に造り始められています。続く平安時代にも仏像や鏡の製作に鋳造技術は使われています。

銚ノ浦遺跡で鋳造がおこなわれていた中世（鎌倉～室町時代）は、それまで一部の人たちにしか使うことの出来なかった鋳造品がずっと身近になった時代です。とくに食生活に係わるものとして、鉄製の鍋の存在が上げられます。銚ノ浦遺跡の調査でも、鍋を鋳造する時に使う鋳型が多く出土しており、ここで生産されたことがわかっています。

中世から近世にかけて鋳造製品は、^{ちやがま}茶釜や^{せんか}銭貨、^{てっぽう}鉄砲などの多様な使われ方をします。近代には、鉄橋や大砲などが造られました。現代にいたり大量生産品として、ゴルフクラブ、エンジンの部品、美術品などに、昔からの鋳造技術は脈々と受け継がれており、現在でも鋳造品を生活の所々でみることができます。

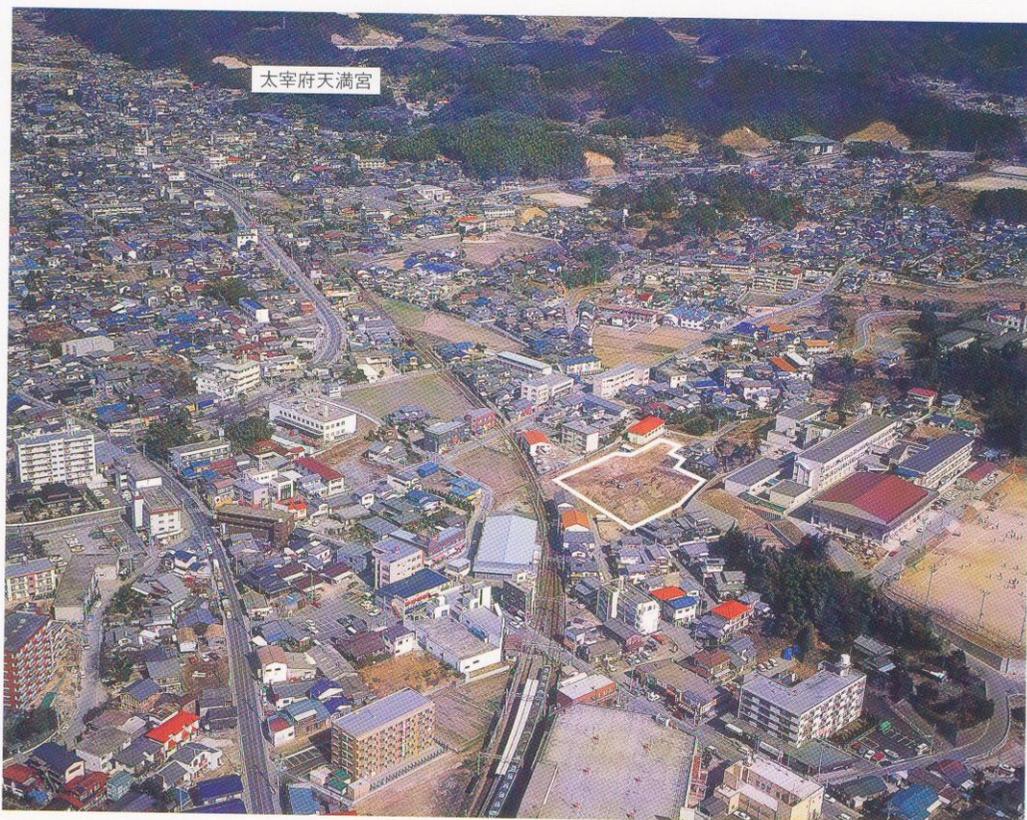
2. 鉾ノ浦遺跡について

鉾ノ浦遺跡は、福岡平野が奥まった東端にあたる太宰府市の五条4丁目にあります。遺跡の南から東にかけては高尾山から派生した丘陵によりさえぎられています。西は大宰府政庁、観世音寺、北は太宰府天満宮に続く平野が広がっています。

この鉾ノ浦遺跡には、今から約600～700年ほど前に鑄造工房がありました。当時の大宰府では古代の「大宰府」の面影を残しながらも、新しい時代を迎えて発展した中世都市「太宰府」が発展していました。

中世都市太宰府では、平野部には都市が展開し、四王寺山から宝満山にかけての山手には、観世音寺、かんぜおんじ原山無量寺はらさんむりょうじなどの寺院や「子院」「坊」と呼ばれる各寺の関連施設が数多く立ち並んでいました。

都市からは日常品の鍋や小物、寺院からは特殊品であるぶつぐ仏具と、多様な需要に対して、鑄造製品を供給していたのが、この鉾ノ浦遺跡で見つかった鑄造工房でした。



空から見た五条地区（白ヌキ線で囲まれた箇所が鉾ノ浦遺跡）

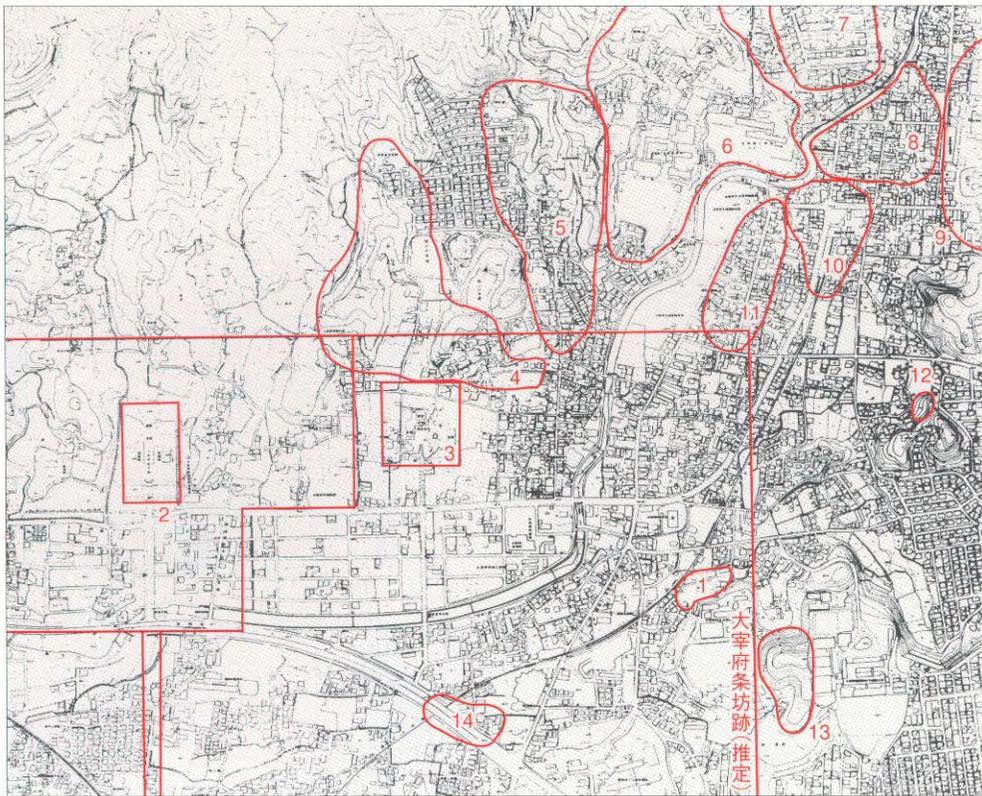


図1.周辺遺跡図

- 1.鉾ノ浦遺跡 2.大宰府政庁跡 3.観世音寺 4.観世音寺子院群 5.横岳遺跡(横岳崇福寺跡) 6.原遺跡(原山無量寺跡) 7.浦ノ城 8.連歌屋遺跡 9.太宰府天満宮境内地遺跡 10.大町遺跡 11.新町遺跡 12.馬場遺跡 13.五条遺跡 14.御笠川南条坊跡



鉾ノ浦遺跡発掘調査区全景(上が北)

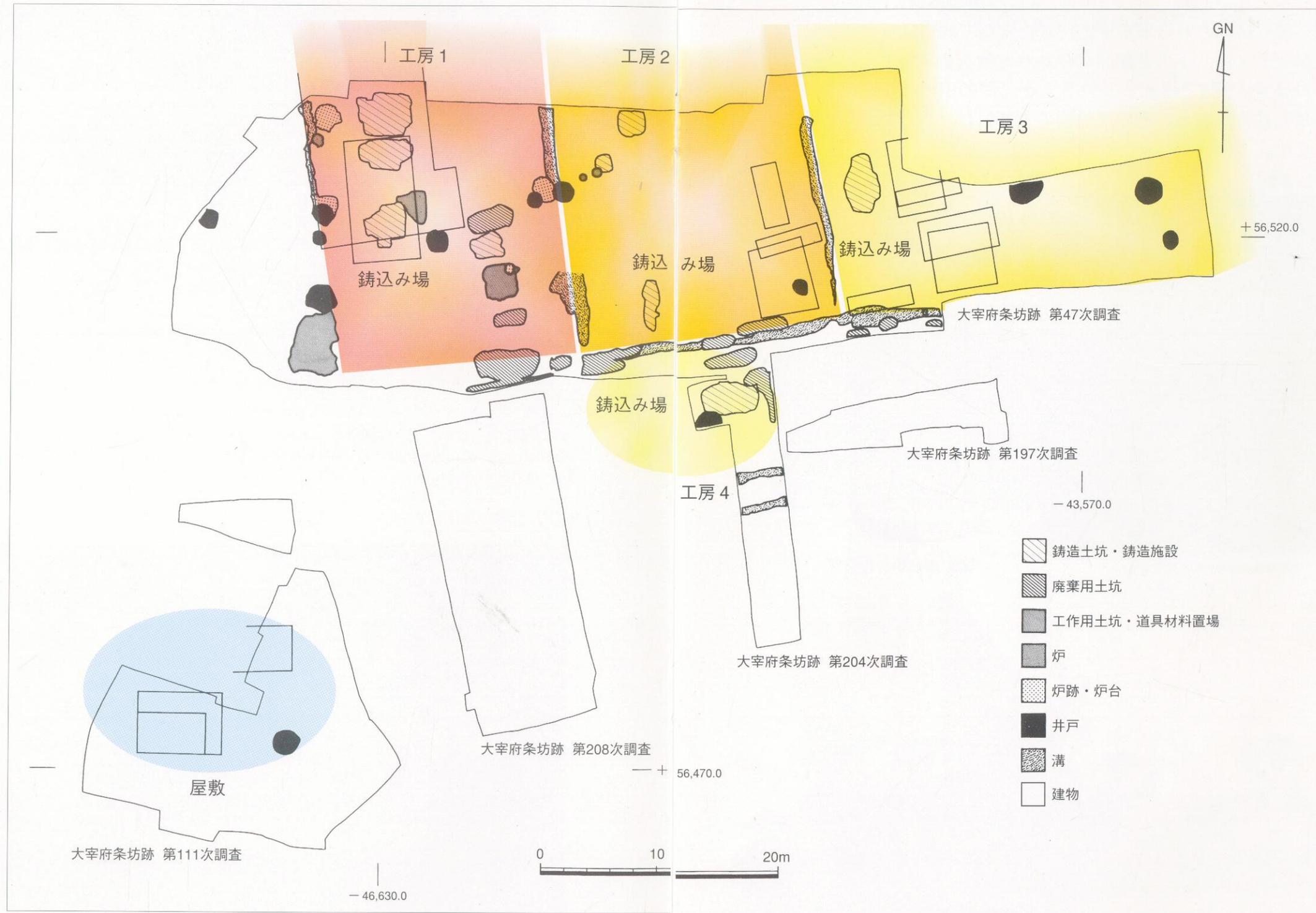


図2.主要遺構図

3.生産の場

鑄造をするためには、原材料である鉄や銅を溶かすための溶解炉、その炉へ風を送るためのフイゴ(鞴)、タタラ(踏鞴)などの送風施設、そして溶かした金属を鑄型へ流し込むための型をすえ付けた穴など諸施設が必要です。

溶解炉は土製で上・中・下の各部品に分かれた物を組み合わせて使用していたと思われます。図3で復元しているように炉の中ほどに、送風口であるフイゴが差し込まれおり、その反対側の下部には、溶けた金属が流れ出る口がつきます。

a.溶解炉 (こしき炉)



炉壁 (大宰府条坊跡第111次調査出土)

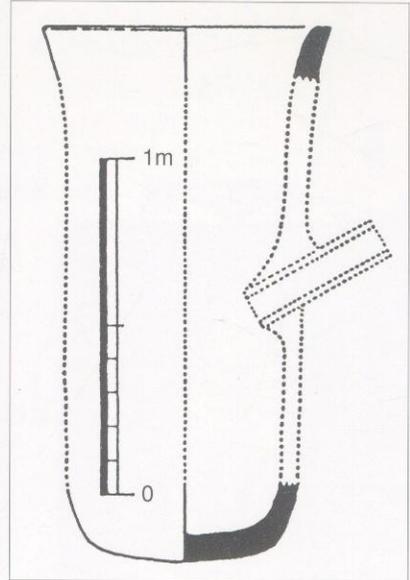


図3. 溶解炉の復元図

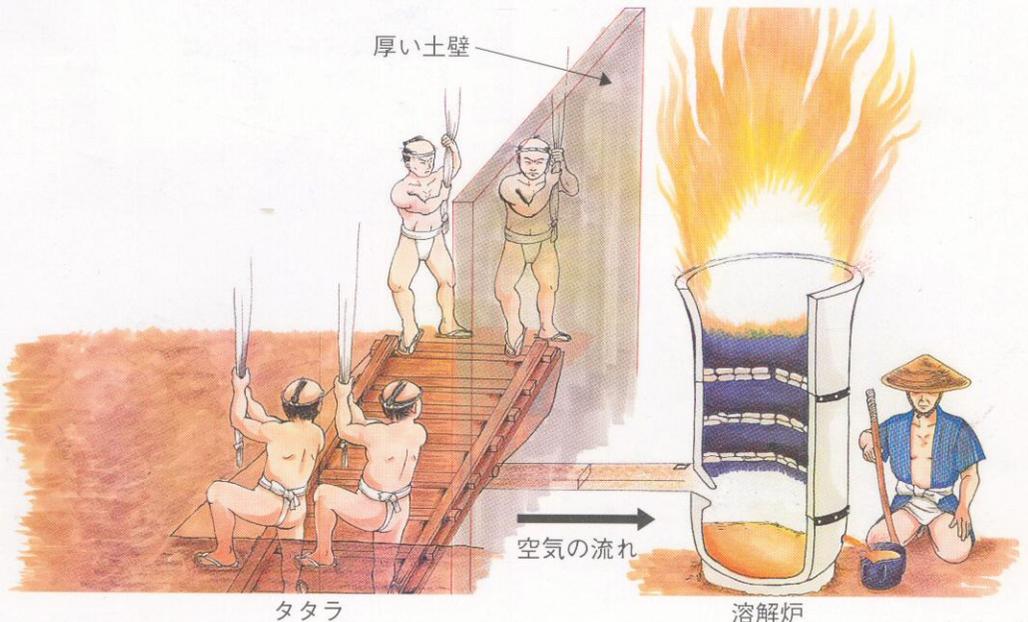


図4. 鑄造の様子

溶けた金属を鑄型へ流し込むと鑄物ができます。この作業のことを「鑄込み」といいます。例えば、梵鐘などの背の高い鑄物を造る場合は、地面を深く掘り、高さを調節します。銚ノ浦遺跡からは梵鐘を鑄造するために地面に掘られた穴が多く見つかっています。

小型品を作る場合は炉の近くで地面に鑄型を置いて鑄込みをしていたと考えられます。

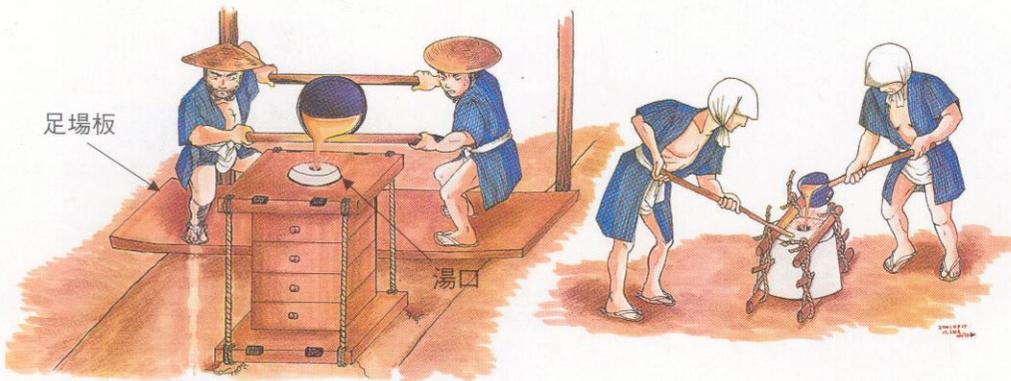
b. 鑄造土坑



写真中央には、円形の溶解炉の底部があります。その左下に方形の梵鐘を鑄造するための穴があります。

穴の底には鑄型を固定するための木を、紐でしぼる際に手を入れやすくするための穴が4つ掘られており、胴木を固定するための溝が日字形に掘られています。

鑄造土坑と炉底 (大宰府条坊跡第47次調査)



鑄造土坑 (梵鐘)

小型品の鑄込み (鍋など)

4. 生み出される物

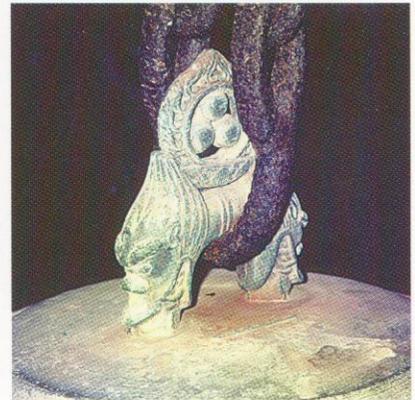
銚ノ浦遺跡で鑄造されていた製品はどのようなものだったのか、その手がかりは、遺跡から出土した鑄型を調べることで明らかになります。鑄型は約15000点以上出土していますが、その殆どが破片で、もともとの形が判明するものは少数です。製品として造られていたものは大きく仏具と生活に関係する物の2つのグループに分けられます。

仏具関係（裏表紙参考のこと）



龍頭の鑄型（大宰府条坊跡第47次調査出土）

◀梵鐘を釣り下げる釣り手の部分を龍頭りゅうずといいます。これはその鑄型です。



梵鐘の龍頭部分（対馬たくとま多久頭魂神社梵鐘）



撞座の鑄型（大宰府条坊跡第204次調査出土）

◀梵鐘を撞つく時に、撞木しょうもくが当たる場所を撞座つきざといいます。これはその鑄型です。

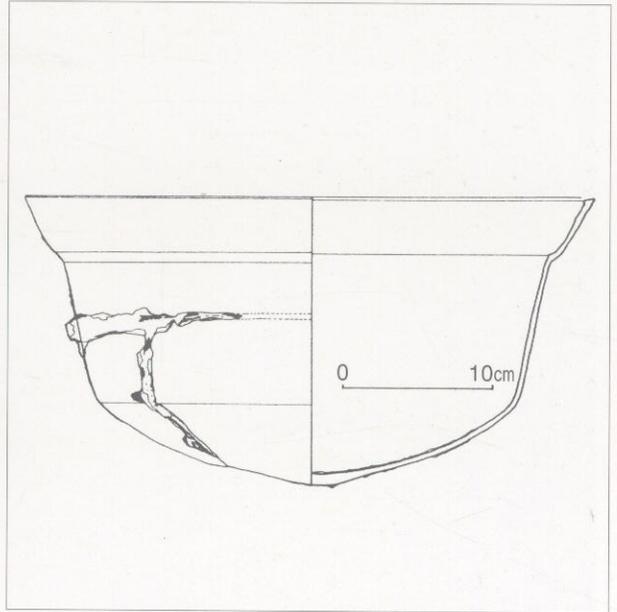


梵鐘の撞座部分（観世音寺梵鐘）

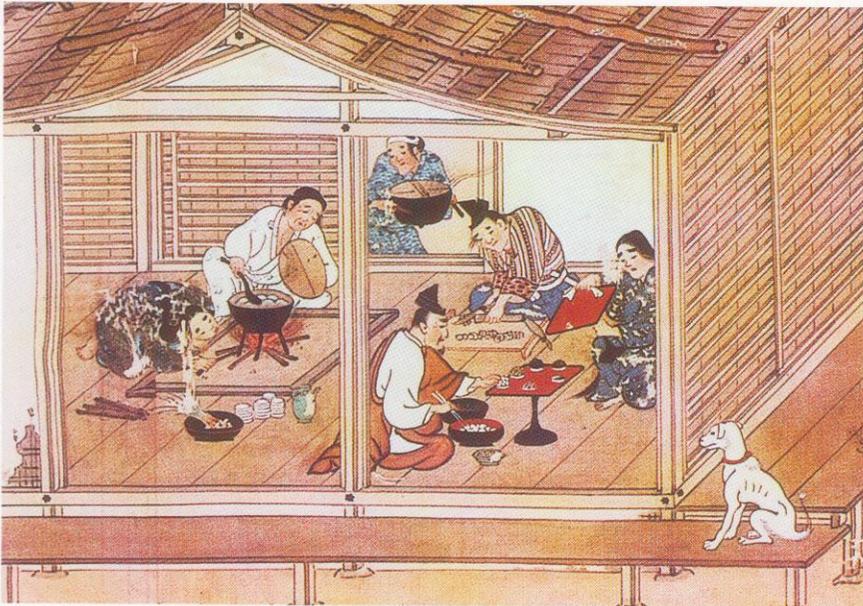
生活用具



鍋の鋳型（大宰府条坊跡第204次調査出土）



鉄製鍋（大宰府史跡第33次調査出土）



当時の食事風景『春日権現験記絵巻』第13巻第2段（部分）（宮内庁蔵）

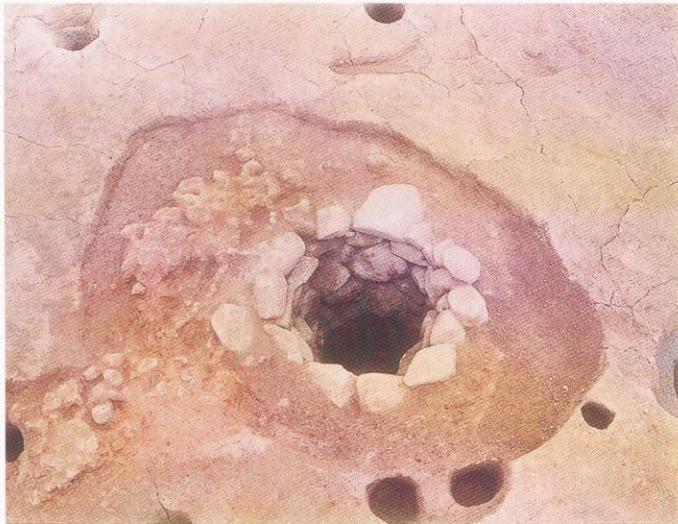
中世の食事風景には、鉄製の鍋が見られるようになります。土で造られた土器の鍋と違い、火に強く耐久性もありました。この鍋の鋳型が大量にでており、近くの遺跡からも銚ノ浦遺跡で製作されたと思われる鉄製の鍋が出土しています。

5.生活の風景



職人の住居（大宰府条坊跡第111次調査）

鋳物工房の近くには、職人たちが住む家がありました。この家からは、多くの輸入陶磁器が出土しており、当時の太宰府の都市住民と同じ様な生活を職人たちも送っていたとされています。



井戸（大宰府条坊跡第47次調査）

井戸は鋳物の生産には、必要不可欠なものです。井戸から汲み上げられた水は、防火水、作業水、生活水などと多くの目的で使われたと考えられます。



不用な物を棄てた穴（大宰府条坊跡第47次調査）

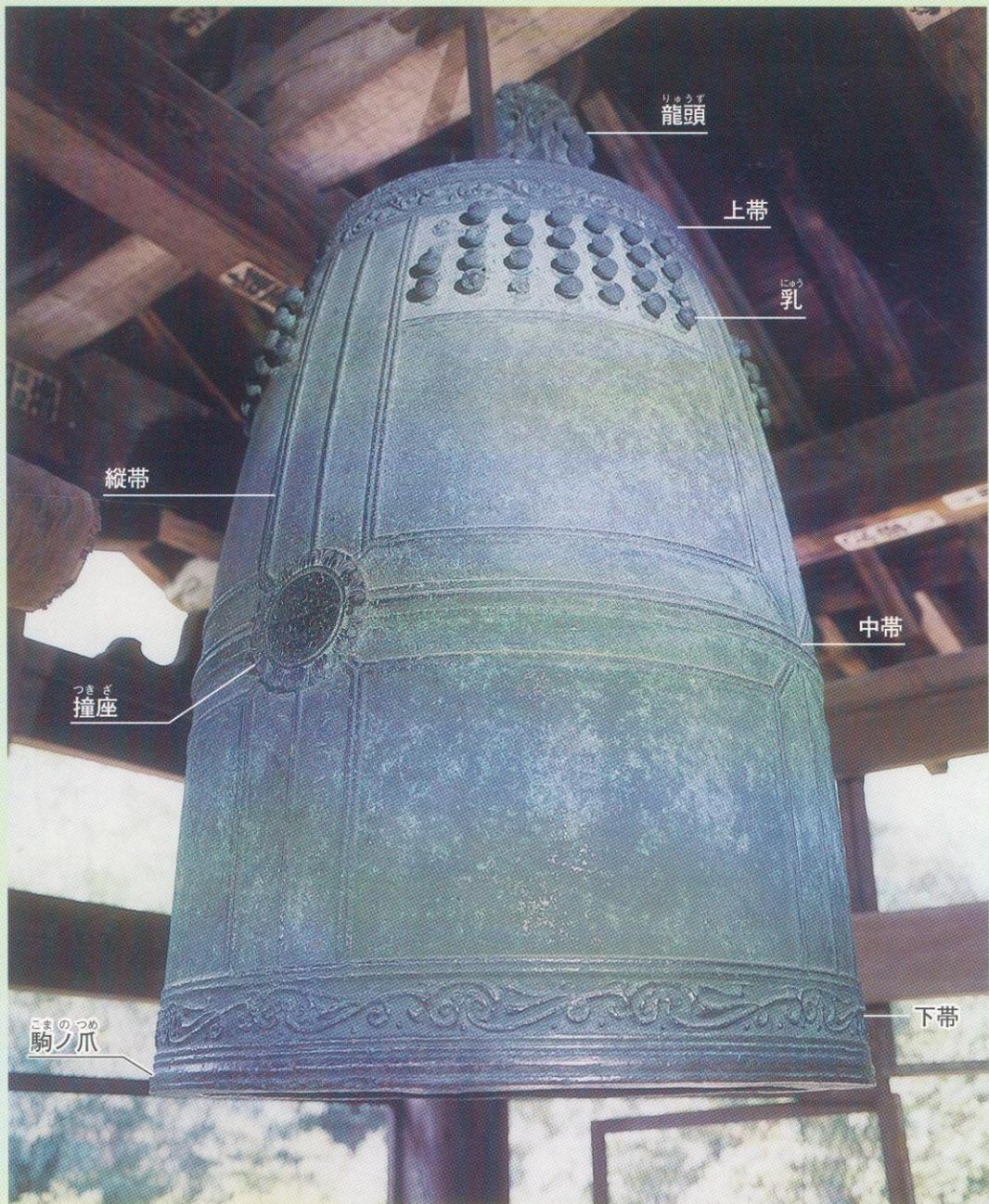


穴に棄てられた廃棄物（大宰府条坊跡第47次調査）

鋳物の作業場からは、多くの不要物（壊した鋳型片、炉壁、焼土、灰など）が出ます。それらは邪魔にならない所へ穴を掘って捨てます。ただし、現在に残る鋳物生産の民俗例では、不要物のなかの再利用できるものは積極的に利用することを行っています。遺跡からの出土物を見ると、鋳型をつくる時に、他で使用済で不要な鋳型を利用している鋳型がありました。このような例を見ると、中世の銚ノ浦工房の職人も同じようにリサイクルをしていたと思われます。

6. 銚ノ浦遺跡周辺の文化財MAP





観世音寺の梵鐘

観世音寺にある梵鐘は、国宝として指定されております。この鐘は京都妙心寺の梵鐘（699年鑄造）と同じ鑄型によって造られたとされており、現存する日本最古の鐘の一つです。

そして、この鐘がつくられた600年後、太宰府の「銚ノ浦」工房の職人たちは、この鐘の音を聞きながら、梵鐘をはじめ、多くの鑄物を造っていたことでしょう。

目で見える太宰府市の文化財4

銚ノ浦遺跡

—中世の鑄造工房—

平成13（2001）年3月31日

編集 太宰府市教育委員会文化財課

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 （有）システム・レコ